



河内名所圖會卷之立目錄
九四
2472
卷一

河内名所圖會卷之立目錄

大縣郡

龜瀨川奇石
數品

宿奈神社

金山孫神社
地藏堂

冰室旧蹟

寡婦冢

若倭姬神社

太狗神社

恩智山

高安山

高安郡

恩智神社
末社

高安里

小澤文庫

此冊影上

高尾山

高安田廢寺

鐸比古神社

支婦冢

瑠璃寺
山井

阪戸原荒陵

常世岐姬神社

高安郡

恩智神社
末社

高安里

恩智方近墓

丸木櫻
教興寺

天湯川田神社
普光廢寺

智識寺
清淨泉

大冢

石神社

崩冢

鷹巣山

松谷光德寺

長冢

若倭產神社

春日神祠

天照高座神社

白飯滝

掃部神祠

八大金剛祠

法藏寺 佛殿 清涼塔

鬼額 四百殿

千塚 石佛觀音

圓鏡池

高安城墟

玉祖神社 未社 梶原御社

千塚 辛地堂 朝比奈參

竹之坊

佐麻彥度神社

十三佈

紫平河内通跡

意の水 花岡山

笛吹松

夜懸巖

別之水 樂音寺

春日戸神社

御祖神社

鴨神社

河内郡

御野神社 恩知川

寺井

津原神社

伊駒山 池鷗觀音

櫻井 太津神社

住生院 捕正成塔

栗原神社

梶無神社 牧岡神社 末社

見澤 一色居

四條繩手戰場

如ト 姥ヶ火

大塚

河内郡

寺井

津原神社

千手寺 長尾瀧

恩知川

不動寺

石碑

千手寺 雙龍巻

恩知川

親善堂

草薙里

千手寺 長尾瀧

恩知川

五子塚

不動寺

石碑

千手寺 雙龍巻

恩知川

御田祠

興法寺

千手寺 長尾瀧

恩知川

御田祠

忠臣旦下部使主

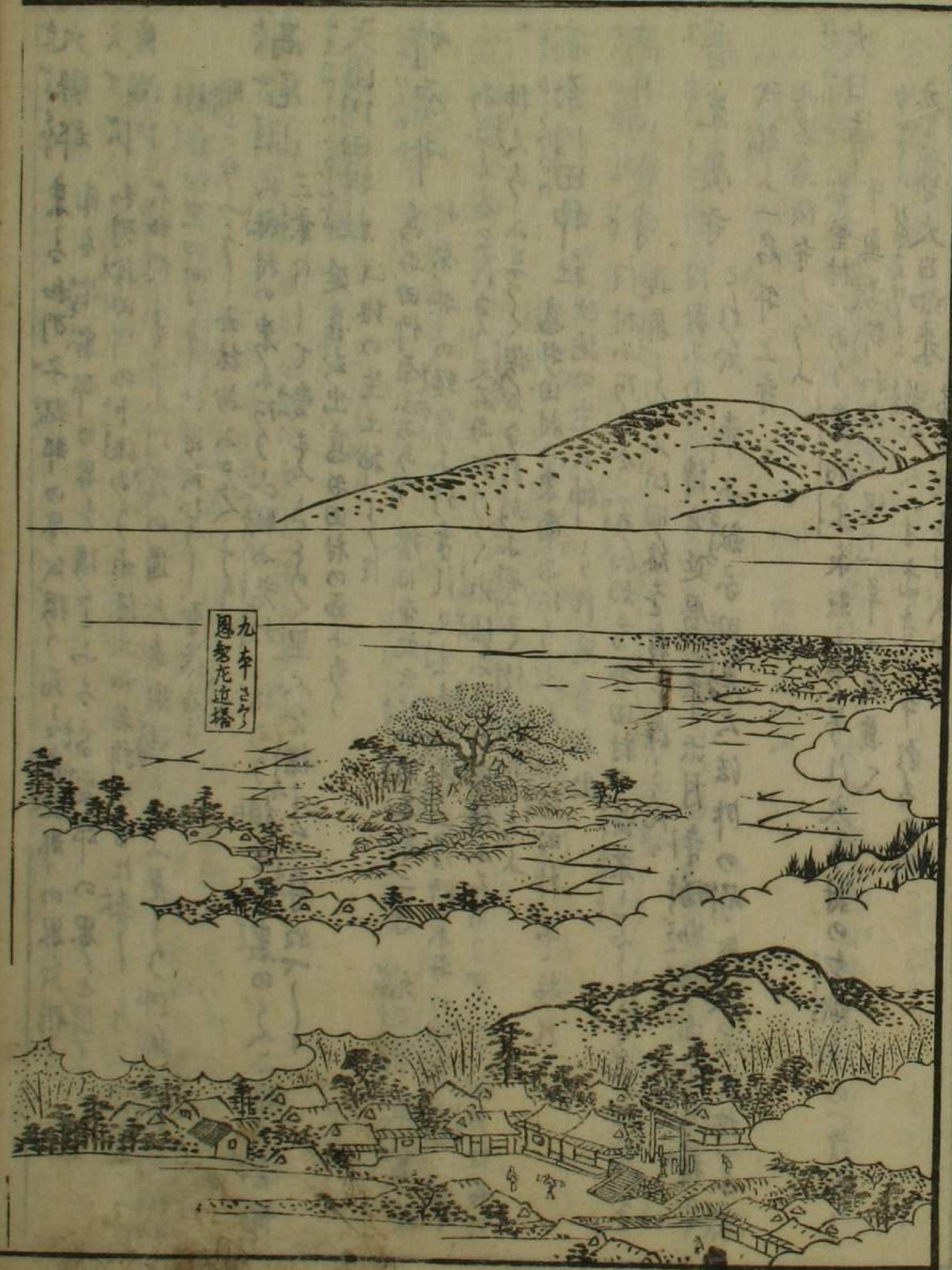
恩智社



河五ノ龍



恩智社



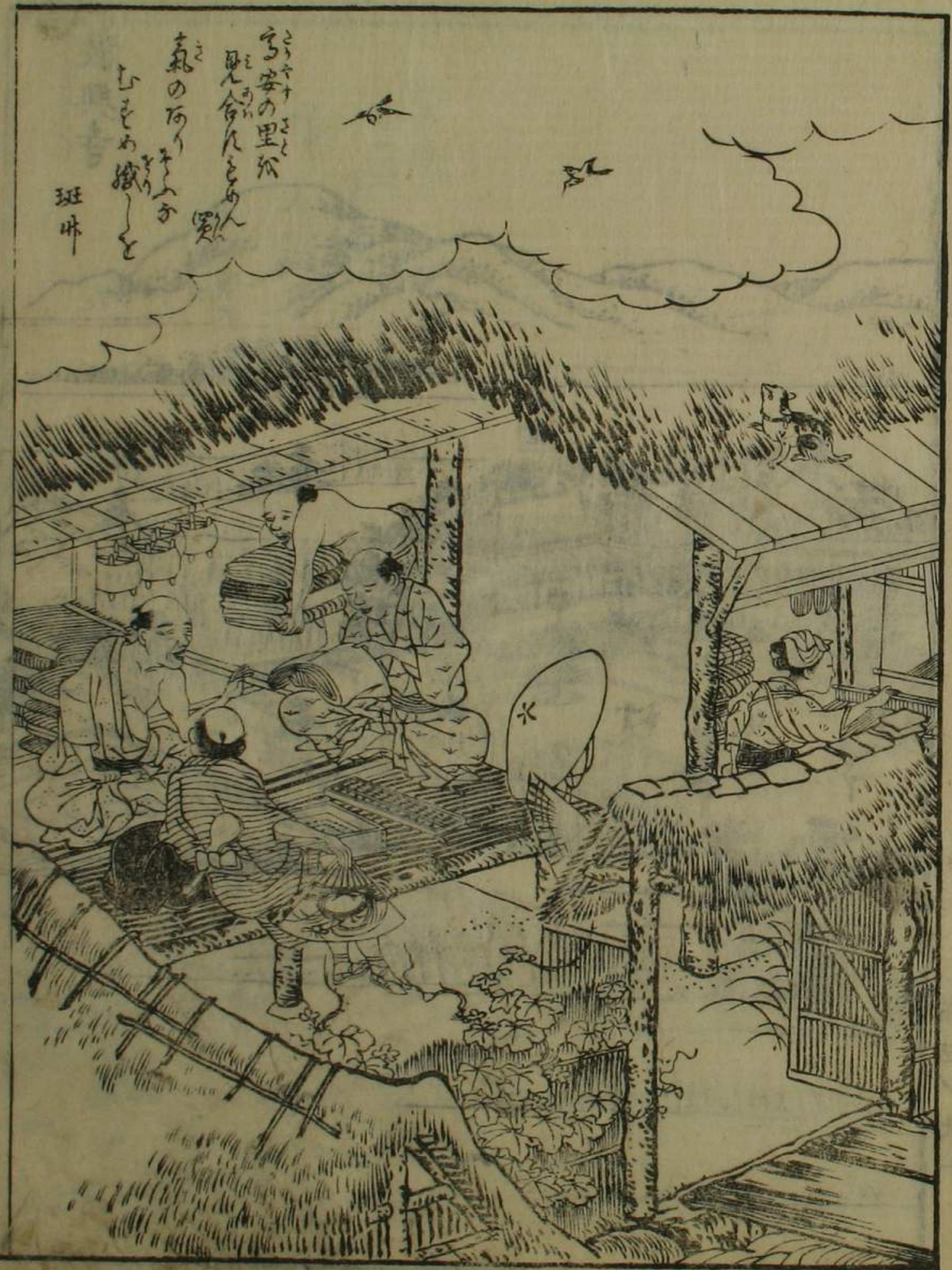
崩冢日村ふあり由縁深す
 氷室舊蹟氷室の跡
 瑞光寺山井村小あり医王山也号に開基と行基大士形り奉る
 若倭彦神社延喜式出太平寺村小あり今熊野と称れ三代實羅云
堂の傍小あり清冷甘味あり開化井也
 石神社貞觀九年二月頤官社は地の生土神とれ三代實羅云
若倭姫神社
 若倭姫神社銚延喜式出平野村小あり今權現八幡二座也
銚延喜式出平野村小あり今吉日八幡也
 阪戸原荒陵平野村小あり里人云御寧天皇陵也称れ陵上本大本
前事小豆山古松あり是事陵也古市於西ノ浦村白髮山也
 地ういきよか明形うけ

崩冢日村ふあり由縁深す
 春日神祠大縣村小あり大縣山井法若寺平野等の
生土神とれ例案六月廿六日
 大狛神社延喜式出奉堂村小あり今山王堂稱れ
 常世岐姫神社延喜式出神宮寺村小あり今八王子也稱れ
三代實羅云貞觀九年二月頤官社は地の生土神とれ
 高安郡東ハ和訓平群郡の東限を西ハ若狭郡の界と限り
 恩智山恩智村の東れ山
 恩智神社二座延喜式曰名神大月次相嘗新嘗 恩智山不あり
十一月卯辰の日文德實羅云嘉祥二年冬十月恩智大御食津並接從攝社を多る未社 熊野吉野八幡宮山奥六七町小あり
 左近將監恩智滿一墓多所恩智城小あり官軍の將士にて王率に
勤勞して志探寔せし城郭の
見附石は還の傍松の入れもあり
 九軒櫻恩智家の側小あり古大樹根際十九軒あり
又二十年経れを桔梗ノ木とふ多くこれ古梅のめりて枝葉の貌甚
 老樹空き一園の名木あり

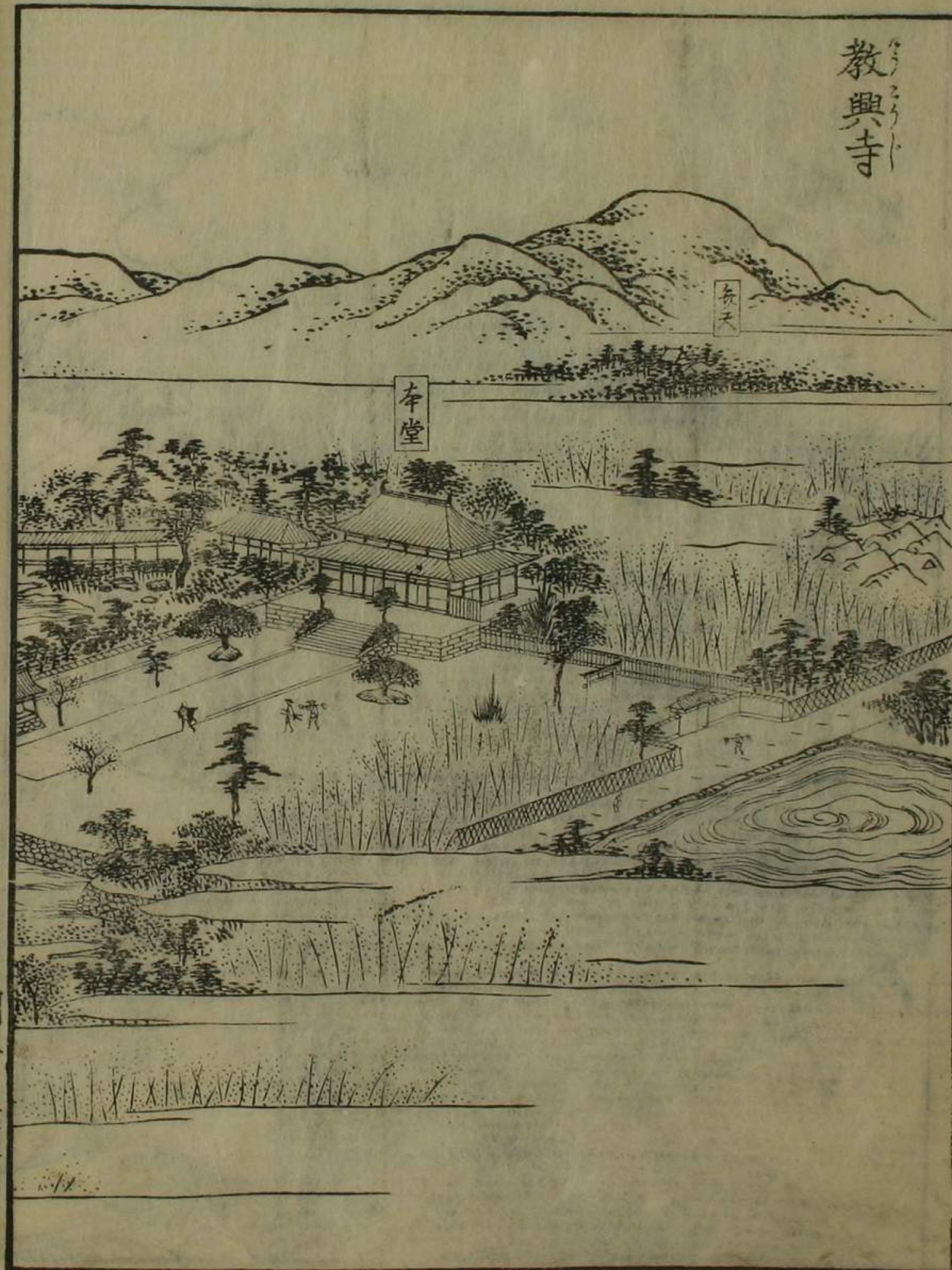
僧谷佛念廬を號又復念堂ともいふ又堂也
 樹後井古達の名泉あり古達の名泉あり古達の名泉あり
 村人出れを始石長持石棒石腰掛石室虛石小豆山名
 石あり又傳游々鹿泉直下小流あり夏の暑氣
 名地耶

氷室舊蹟氷室の跡
 瑞光寺山井村小あり医王山也号に開基と行基大士形り奉る
 若倭彦神社銚延喜式出平野村小あり今吉日八幡也
銚延喜式出平野村小あり今權現八幡二座也
 石神社貞觀九年二月頤官社は地の生土神とれ三代實羅云
若倭姫神社
 若倭姫神社銚延喜式出平野村小あり今吉日八幡也
銚延喜式出平野村小あり今吉日八幡也
 阪戸原荒陵平野村小あり里人云御寧天皇陵也称れ陵上本大本
前事小豆山古松あり是事陵也古市於西ノ浦村白髮山也
 地ういきよか明形うけ

河五ノ五



教興寺



河五ソ七



高安の
里
寧
風
宿
宿
宿



高安山

一郡の東にあり平城都の佛時燈籠を舉

日辛紀曰妻日野の族也和通五年正月河内國高安の烽

火聖の所小見今古ノ城伏山形の體ふと有く遠き處

又元亨釋書曰寛平九年沙門明達高安縣中東小登里生

駒谷の仙家小入づく歸ふ坐りは地風氣あり御波乃

西の海北水門源遠小足之ワラニ曲狹の拂地也

高安里 かくす安一郡の村里也

宝治六月 かくす古詠多

新六帖

雲をねぬ徑馬たみのひよんくともやもやも安の里

源家長智

表をくのこぬゆるゝ小月えく夜うれすり高安里

後人手記

これゆとひくら立田内ふれ端り育めの月とも安徳里

鷗長明

名產高安本綿

は那内の農民綿を多く植てある家每小巷男女大

幅廣く深々小色より漏らず小強地へ是を河内本綿

ハ尾久裏ちのあい人村を孤らぐ木綿と雲

織

一叩河内うひの本綿實まち叩子袖白一垢白

外村人

寺主ひめ

長慶文余度像

立み秦寺

は教真寺の堂内小安に神像あり弘法大師の像也

近年観

玄比丘再興を佛殿天井の画と蟠龍を墨く狩野

絵伯邑信の筆おり庭中

本石風景ありて奇雅也

獅子吼山教興寺

教興村小あり三丈許土人難天勝と云

辛尊弥勒菩薩

聖德を子拂也

白飯瀧岩窟

窟の南小あり高サ三丈許土人難天勝と云

天照大神寫座神社

二座延喜式曰大月次新嘗元春日戸神社と号

也

神像あり弘法大師の像也

又長七寸

側坐六月七日は神の生ち御とて回詔も山腰み

て巨巖

魏く一箇の岩窟を神窟とて御小龕も居

あり頃天石戸

ともつぶだまき岩窟あり生めく小神

代うのそぐ

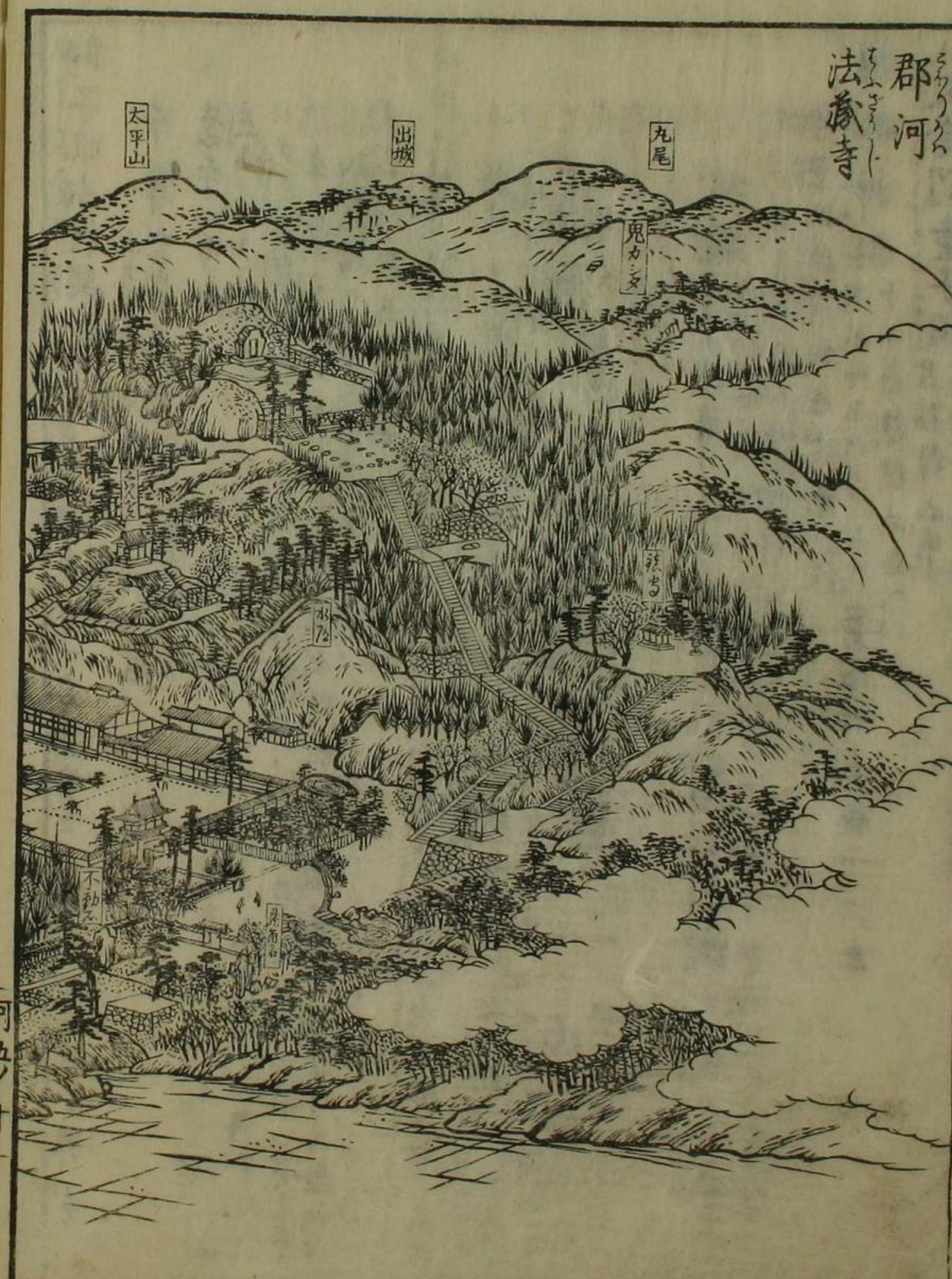
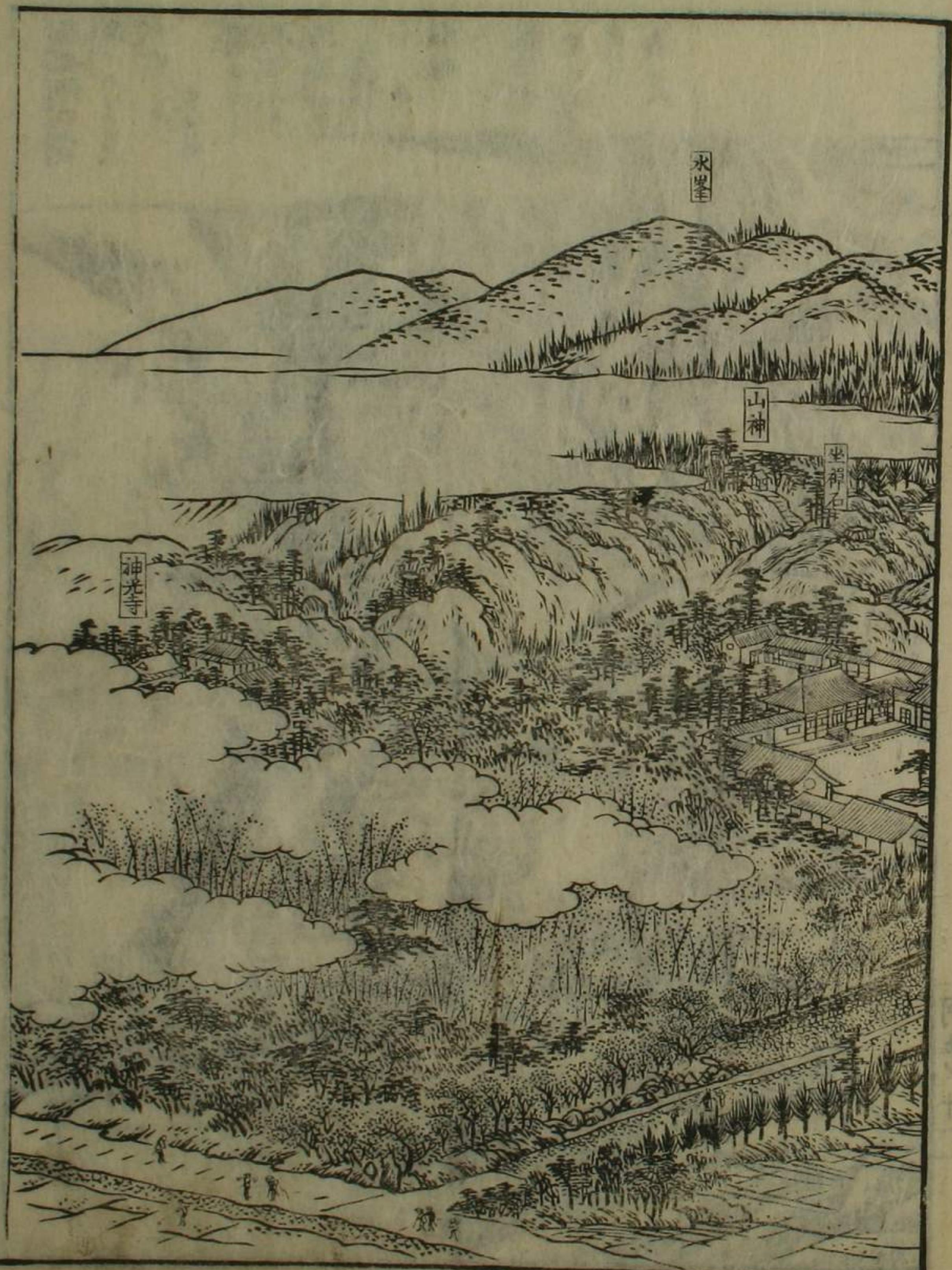
形うべ

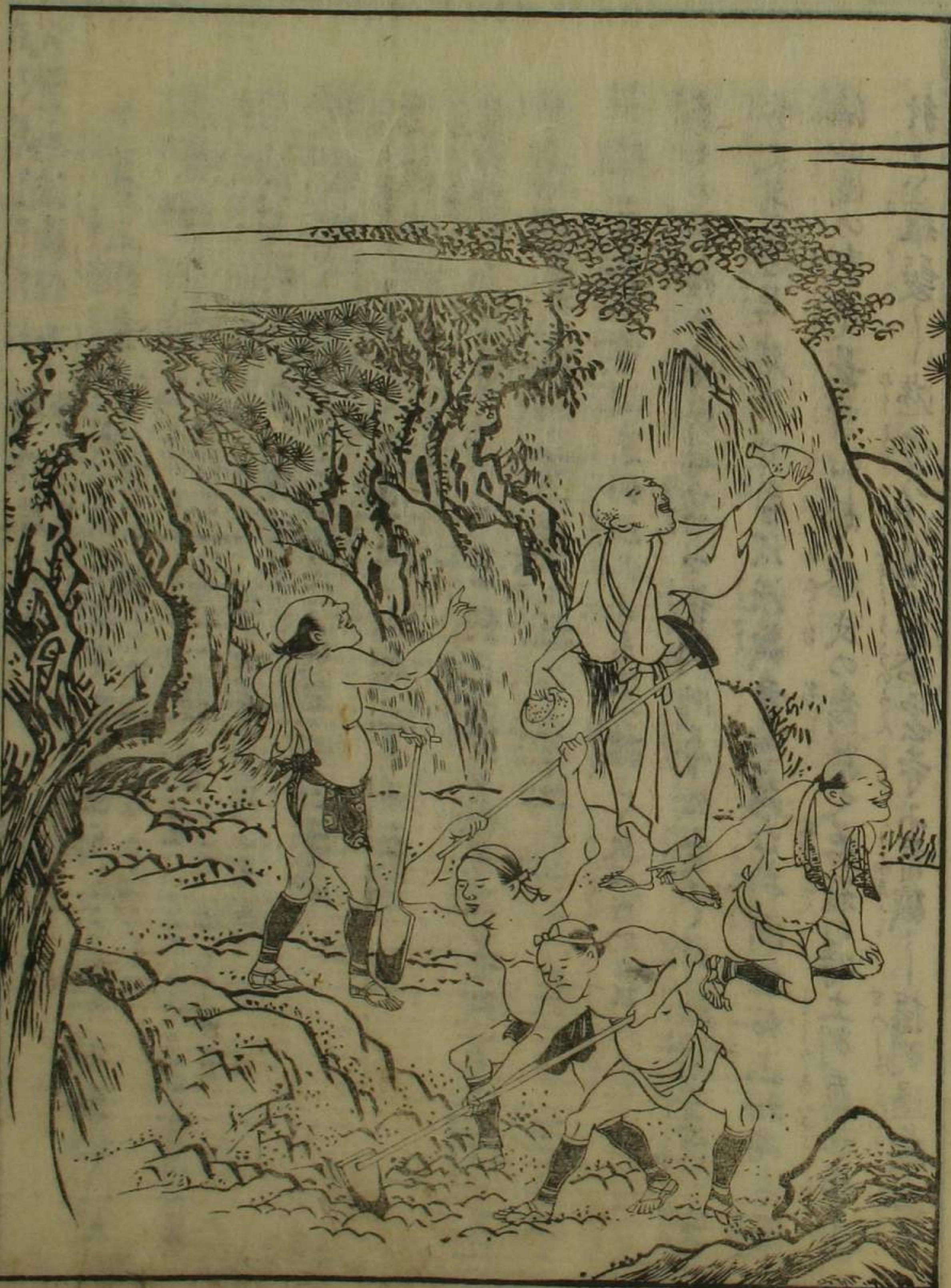
掃部神

祠黒谷村小あり三代實縁曰貞觀十六年

八大金剛童子祠

黑谷村山中





河五ノ十一



大覺山法藏禪寺

禪宗曹洞派

本尊正觀音佛殿右不缺處供弘法大師之像

石像觀世音菩薩相傳弘法師所鑄也

鎮守山之巽位有金毘羅檻觀

清源塔妙高山和尚之廟塔

圓鏡池堂前之池也其外朱蓮池玉蓮池

登龍阪當山之坡石有左石不刻石

支坐山古寺也創建久遠在圓基之下詳小史

年久失荒蕪乃以漸元祐中鑿汎的僧居之小住而極樂寺

之號也厥后曹洞宗好山和尚亦小棲之再營之後頃矣而弟子

嗣附之現住仁海和尚家也豈側昨令法空改佛殿諸堂寮會

方丈者悉再建之名法藏寺也改之柳園和尚之南

海四國の刺史長曾我部泰氏の裔孫く若冠の時土州真如寺小

院く蘿髮く遊方の後防列泰雲寺小首職く提列退藏筆

其精妙を得

天桂禪師小從く嗣法く總小寶曆十一年二月廿二日壽山不諱く
寂化年七十二代益洲和尚も亦同生同姓の人少く止歟く精
舍の營建事く道俗高く祥符少く丹青少く善園少遊
画名を隨緣齊無礙空号く沈氏が者流を慕く虎松園にて
其精妙を得

神靈泉寺の東南懷抱園の中ふあり傳云幽山初免水乏く
霖雨の時も濁流なく済服祁門の溪水を汲く日用にあつれども
篤る年七ヶ年一衣袴神龕の中少く中主所と定め
それより後丈を庵と庵と號并戸を鑿し年二洞計これと申す
一窟も取く廬丈方ふ房と號んと云ひ蓋測候木板土灰神祇ふ
み御少く靈泉涌も少く半偏々とて既のやうられ龍神
の意號くして洞の樋少くねく舊をよのく摩衰が丈の座中へ
ある半に時多く行と今世の奇物たりとく圓く人
感美せばゆく來か

題神靈泉
一自龍神現夢中昆明緬想漢時功
刺山勢向巖崖發卓錫心依勝蹟雄
碧水春寒橫竹引銀河夜冷透雲通
禪餘茗飲甘瓊液更愛孤琴聽不窮
肥後州禹舞



神玉祖

百神歌
題尺仙枕

溪縮丹法
声地梯藏

寺到三霄

雨里頭招提

獄連構
一レル
色天在

一
薛蘿幽
十五州
畫當
婁

卷之三

佐麻多度神社は里の生土神
眞徳磨古跡ふ畠村の中小有り土人鏡冑を以て一就小修
百瀬王の後小くふ畠長者と号し延暦中の人に
弱法師小足之子大坂主王も南門の外小眞徳街道あり

至
玉祖神社 神立村山あり 延喜式み出 迎村十一箇村の生去神也
末社吉野三十八所神 恩智
住吉八王子 駒子
奉地堂 又傳小地堂もあつて

菌光寺竹之坊
当社神官寺と
眞言修止也
壹演傍正の感深く
幸尊千手觀音

初メ當寺小社ゆひ玉祖の神
御ちん室おとせゆひ山の神忽然
千手大悲の御容徧々人則テ
幸地空とれ什賓小梶原平三景時
之御有り又朝比奈先
三郎義範の書あり方より記す又幸間孫四郎
の子恭神主
村の農家尔而
梶原景時制札曰

江國蘿葉寺
鎌倉之古跡據所也。お寺并田畠山林木
甲乙人等不可有亂入妨之狀め申

文定元年十二月

平
居

朝比奈舊稿

其後數日，有司奏：「漢王已殺子房、韓信，又殺彭越，誅滅魏王，殺魏將軍、軍吏數十人，皆殺降將，殺降卒數千人。」上大怒，謂蕭何曰：「吾令人望其氣皆爲龍成五采，此皆天授，吾非無天授，我所使皆失之，豈天弗與哉？」

卷之三

義能四

十二嶺

夜掛岩



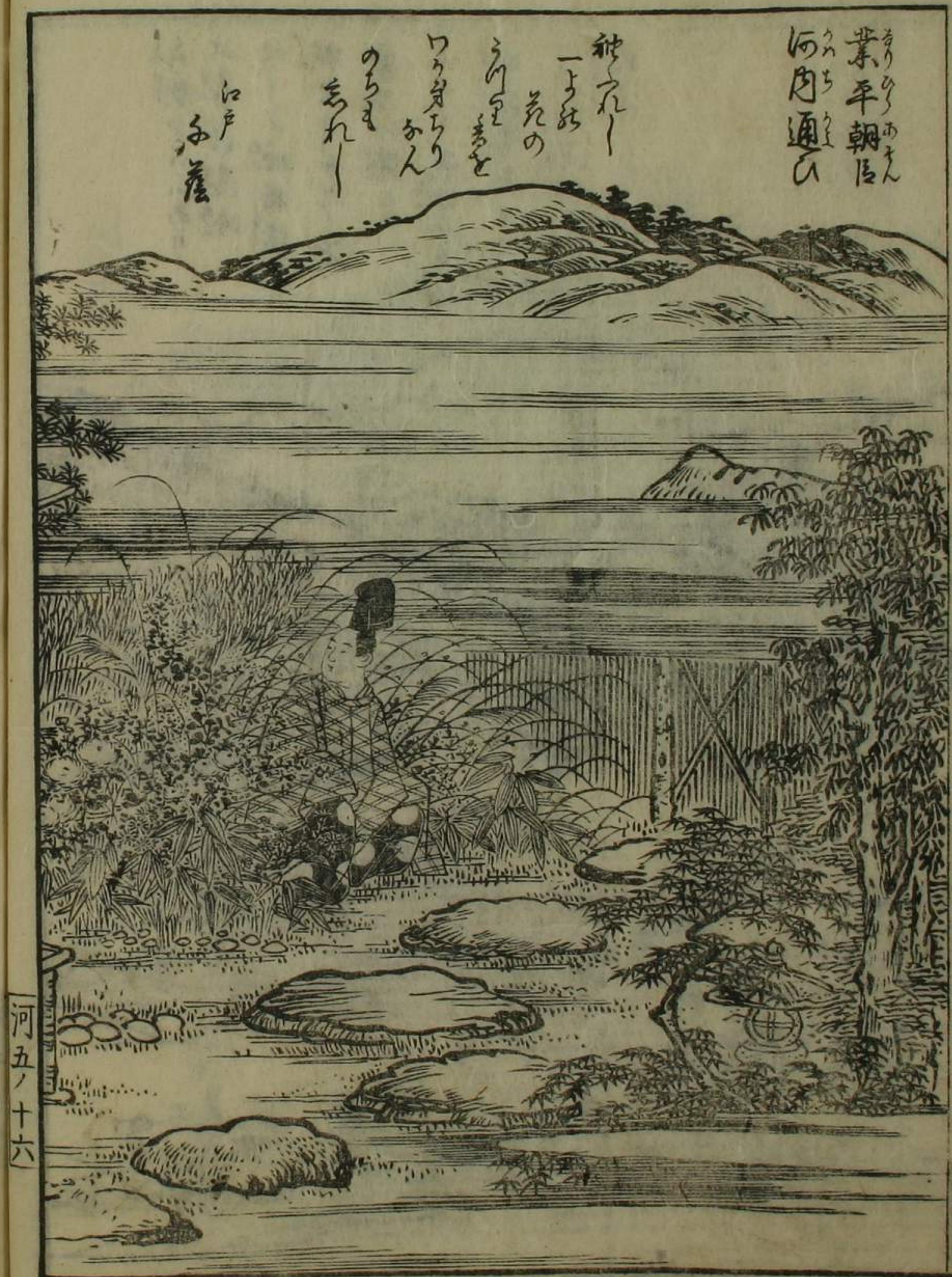
河五ノ十五



あ欽せりより
け盡氣清冷
減かく四時塔
夏日の湯を
志のぐ其仰る
地蔵堂あり
これ紙吹の
地蔵堂



河五ノ十六



業平朝臣
の内通ひ

神在アメニ
一ト故アツコト
花ハナの
うきを
わきをうり
からん
わらも
あれアレ

江戸
ふと

笛吹松

十三樹 乃の小池のほとり
はねの草むすびと散歩を
お風呂とてがの女ふくらみ
わの侍よろり車中ねの内かよひのそん邊せきの
被ふめりうち毛毬をぬぐてひいともゆふ

千葉よりは又其夜紅梅塗の色ふ耶ん有る
さるふるくみを移岩もひ傳ひり
神立村小川大和國紀有常
がむきぬ眞女の様となく
別の水を平らに引けり乃ういのとしむ

物語
うちの園たゞやそれよりふりて通へ所へてきよ乃わうり乃わ
このもよれ女あくねりてるにれもゆくとせりありよま
れとてとんあきてかくらやわんをあきひくしてせんふの
ふくふれゆくかちーいぬくぬくとくふせ女いとよ
をはくしてうちあつて

風ああおきし白浪すよふ衆すふや君うむくもも後
古今集のみ人ち次詞書えあほんこめうともあたわ國かくられ人ま
むを失ふあもんをそりてりとみこの女親もあく處て家もそろくおう
りうのとよもおととかられぬふんがあひもくくわうひつうれせん
めを失ゆきなううけきともけを承る事きもくくわうく
いくつふ男れん乃アラアアアアアアアアア
思ひくもくわうアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアア
アアアアアアアア
アアアアアアア
アアアアアア
アアアアア
アアアア
アアア
アア
ア
ア

ひくもほううされ今へあそびくまほういふひとうてけとのうとおりのふ
きりなると見るふうかでひきを成ふううううれとかの女とわの方と見えやうて
あうあう見えはからむ修道ふ事ふうそゑひうらも
せひくえひふうにしてやまとくさんとつうよみひてまうふ
たひくもれねれと

君ちんとひく表すふ色ぬきひたのすぬりのこひげをめ
とひひれとれとをあきがふうり

法音を育ての御疑也。曰近臣を紀有常。うかま
草ともよき眞女のふとゆうえん爲へうく
所謂御疑也。初一極盤神社。又伊勢の御
加くさりんとふねりく又其角ふも生つてまく
七条后醍子トもるゆく説多。又賀茂真御のわ舊中
御の古人文術をみやびをくま
業平の御遺物。御ふくともかく
其證も其時代高貴の人名をあらわす
伊勢の御他小あざかふ半筋鐵
半なり好色の半とおなじ
半りて形り併勢人半僻
とつ半古おふ多くう
とくをもく

譯
語
古
意
下

子親の氣法とや色めん爲てつる重れわうふ写あり

新勅

後古

法の月々一々もととくともこそ承文ふ乃あえりし川

延保百首

生駒山と並ぶ鳴尾の冲ふ先てらみをからぬ峯を越え雲

源家長

正三位

忠定

御

野縣主神社 鎧敷延喜式出 上ノ高村御郷ほ小あり 今天日社

正三位

行基

寺

井

福萬寺村小石

寺

島

觀音

正觀者と安

池

島

觀音

正觀者と安

津

原

神社

延喜式出

市場

村

津原

張

の側

小

あり

今

玉串

明神

恩

智

川

源

高

安

郡

恩

智

村

の

少

く

流

水

流

川

の

度

至

く

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

度

金堂の卒^そうり 肉道場阿弥陀佛

額^{がく}岩瀧山往生院 六萬寺村小あり。淨土寺と云。仁德天皇十四年掘^い大溝^ヲ於^シ感^ム乃^チ引^ニ石河^ヲ而^シ潤^シ上^ル鈴鹿下^ル鈴鹿上^ル豊浦下^ル豊浦四處^ヲ原^ヲ以^テ墾^シ之得^四萬頃田^ヲ也

水^ヲも^レけ水流^ヲ

岩瀧山往生院 六萬寺村小あり。淨土寺と云。仁德天皇十四年掘^い大溝^ヲ於^シ感^ム乃^チ引^ニ石河^ヲ而^シ潤^シ上^ル鈴鹿下^ル鈴鹿上^ル豊浦下^ル豊浦四處^ヲ原^ヲ以^テ墾^シ之得^四萬頃田^ヲ也

正尊阿弥陀佛

觀音菩薩不祥

補正成塔

額^{がく}岩瀧山往生院 六萬寺村小あり。淨土寺と云。仁德天皇十四年掘^い大溝^ヲ於^シ感^ム乃^チ引^ニ石河^ヲ而^シ潤^シ上^ル鈴鹿下^ル鈴鹿上^ル豊浦下^ル豊浦四處^ヲ原^ヲ以^テ墾^シ之得^四萬頃田^ヲ也

正行墓

觀音菩薩不祥

補正行墓

額^{がく}岩瀧山往生院 六萬寺村小あり。淨土寺と云。仁德天皇十四年掘

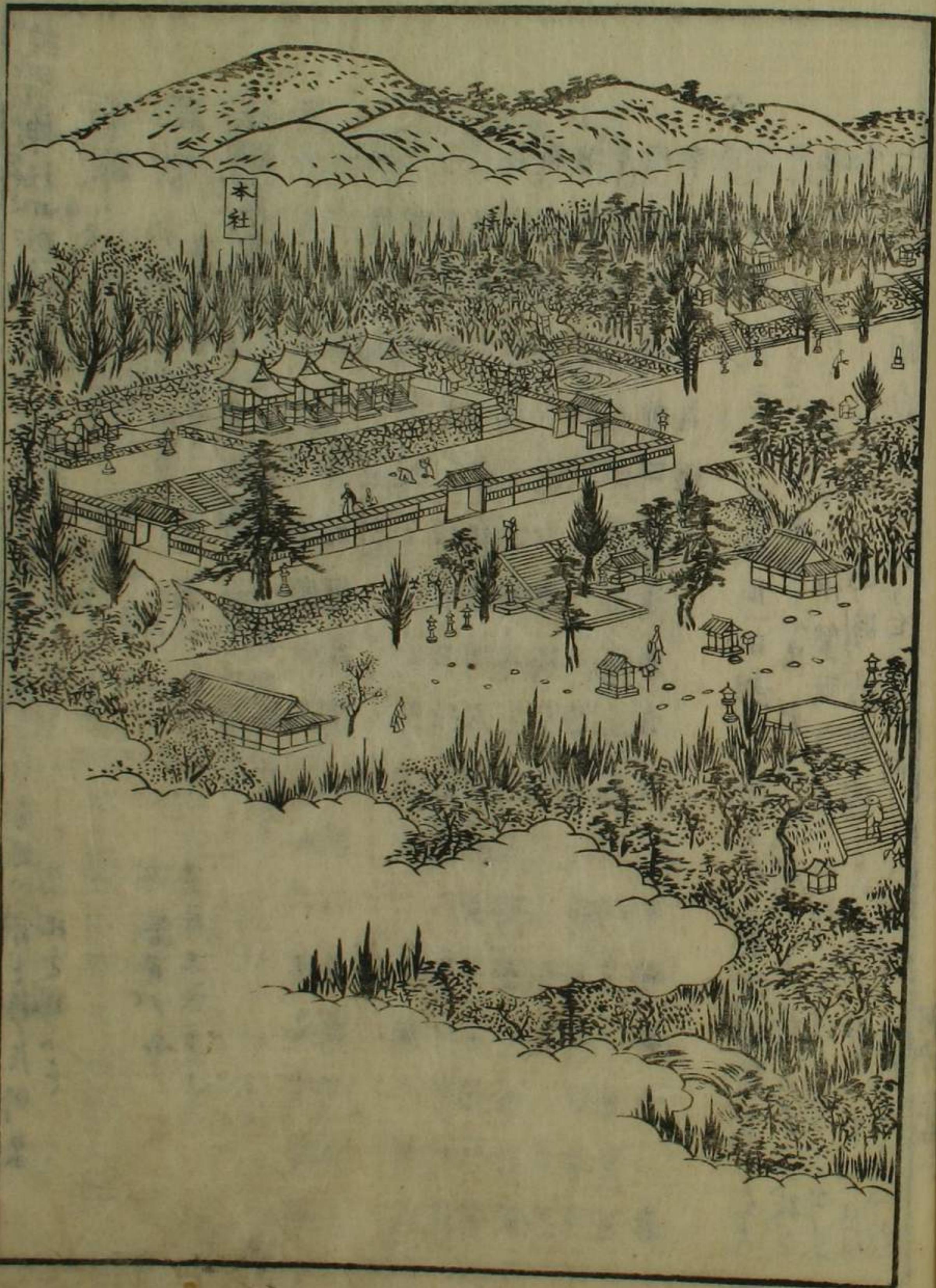
王子衆とて四人の社家其苗六萬寺の旧記を傳
廢て今權現の靈天和の末淨土宗の供奉海東翁が本ツて移今
の荒蕪弘教寺を系跡の堂上象へ言上卒堂小ニモ佛を安^シ常川
念佛の道場也^シぬいふ^ア役者山嶽を^シ駒駒鳴川
鬼取ふ^シ久く修^ム篤^クの地と^シゆ^シ當^ムふ女人の荼毘^シを^シ
夕^シを^シサ^シふ女人の火事^シと^シ称^シタる

四條駿戰場（太平記云）正行戮死の所あり或か云四条繩子へ櫻良郡北条村ふありと云
高師直陣泰祖定ハ幡小旗年にして猶諸國の勢と待調へ河内へ
向よべ一也議（太平記云）擄已下逆害ふせん爲ふを望え矣（太平記云）而今日
河内の往生院小弟の也聞へるを仰泰祖は正月二日定死立く武萬騎
和泉の甥乃浦み陣を取陣直も翌日二日の朝ハ帳を立て六万騎驕四條繩子
小弟着付候やぞ相近へ公をも極定と雖前を承ふて皆相待りん寄ても

更に也寄らむべし便あらず一ゆゑくニ軍五所不分を名雲の陣をかゝる
傍小設け陽も備へ中畠 捕常刀正行今身正時和田新兵馬高家全軍射殺意
陣代駕智景立三千騎騎と率てく處居れより暮直不四條繩を押寄まづ行侯の
破瓜かけ敵をば大將師直ふ寄合て勝負弧決せんとおも擬議せば進ぐる縣下野
字白旗一揆の旗頭かく遙の峯ふむくへうなが菊水の旌只一流是非多く民殺す
の陣ゆけ入んをを防を尼木北の岡うる狹山馬もとくと飛下てた今故ち
ツケ入んをす道一文字小遞て東西小綱と立りうる徒立ふ成くせよ油井く勇氣
熾あく猶勢僅小徒立ふる歎孤異すく豊穣べニモ小分うる赤陣の五百騎務用く
也射てゆふ衆勢秋山ひ孫次郎大草三郎左衛門一人直あふ進ぐ射落三郎居野
七郎是を見て歎不氣と付ト も杖山が附く上矢先越て姿をわざとせや
射向の袖を扣く小跳して追ふぐ歎東あくう雨の際揚ふ射る矢ふされも
内甲草摺の端二折笠深ふ射つねく左刀と例ふけき其矢矢拔んとえども
所を和田新兵馬高家全軍射殺意







牧園神社四座

出雲井村みのくに國政故信くにのじゆて南國一宮と祐いと例たと祭まつり

祭神

三

經津主命

天押雲あめのくも命

申社南みなみ小あり

二天津兒屋あまつ根ね命

四武

甕祖おき命

若宮

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

猿田彥祠さるたひこ小あり

三

比賣

天押雲あめのくも命

申社南みなみ小あり

二天津兒屋あまつ根ね命

四武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

比賣

琴祇ことぎ絹觀くわん侍し

平官ひら布ふ

中人なかひと

神かみ

四

武

甕祖おき命

延喜式

三

<p

天下小威を聞く者乎。於是上奏して曰。近年足利天下的權を
株へる官領互小鉢先立すト。王風裏弊して天業輝く
幸か。不佞尾列小出誕の時母爰の中不日輪を看せ見く姪
仰を依て日輪の照を所麾下小属せだと。幸承。後れども
二軍五兵の運と徳のまわりと申せば願ひ勅伏下。閑白乃
市職を許し終り仁政を施し國民を教育せん王道舊小歸。
四海清平承んせ奉し終り百官儀奏して遂に勅許少哉
極うる時ふ近衛公久公。因園向ら執柄の職すて武家これ
任ざるの例いまだ聞じむつ。天子の外戚援禄の外これ小任
を例か。や獨避て終り猶ねども早勅免われ是非かく
龍山公蘆摩園へ左遷の拂身とぞ感か。猶ねども三宗も經を
一そ帰洛。終りとぞ聞く。拂下向の仰る拂舟小められ御波
深。河底の急小拂舟小められ河内圓平岡明神も遣組多呪

屋根の御神されをくふ宿し拂りくら其時神承を拂御度あ

拂きり迎え衛もそれあらず身と百發か遠源守

然山公

をあくせはうの果さて拂下向き。身と百發か遠源守
神酒戴き終り。拂土器を乞せば不其神器忽發也。一
破れ小なり神人聲。拂土器を乞つてある又碎く亦のべ。故ふ承久公不
思議小お。先づは彼と先づ神酒供給られ設小明神。されば
ゆゑに悉も御くりなし神人從者も皆特のそひを以て小了ば公。拂神の
遠孫承がよすれぬ。官ふりてせひ持少と徳の勝をせぬ。一
ゆゑに素焉よりしゆと人々奇異のそひゆる。ふる拂龍山公。歳
星の呂とも。ひは僅なきのを賢者位小車に財と徳星天小見る。夫
齊も周の栗張答だ屈平。拂廉直。と謹人高く強く嘿々。夫
子陵と嚴子離。小傍まく納伏事あられ。賢賢者の炳焉。ふる拂岡
明神。公の精誠する實をも。召く拂土器が生ふ取かりゆる

又神德の新うらしく其うり額田村の奥あら不動寺長尾瀧など見
めぐらゆる津船ふ呑れ八重の波風をみのだす河まがくみ我く
お主じき終人

こつまの國額姓那ふ天麻宮今序建立ありて

懷中か

川の邊

おふ公

名寄

川不濟

、

この主の御乃う波や海これらはうせ爰士とづくん

右の旨記す寛永十九年御内閣の後胤葛田從五位上修理權を支源宣
度の書れし額田寺社御起の奥書ふよ粗ノアノ御かく二年の
後御屋落成して沿東京照寺銀閣の間京城堂へタハ此寺小
園居ノ修又元禄十二年己卯の秋天下旱甚き其時近衛開自
大政大臣基熙公祈雨の御詠歌御前教小遊され御短冊と申し奉れ
大明神の神殿へ納あり不忽靈雨頻ふ五穀豊饒を其時乃
勝すふ

比良と云あ處うらすに神うらの民うらすあれどに是
レ御短冊神主を居民をは後旱の時祈雨小神殿へ持げよと令あり
て多居忠勝へ修へて當神寶移とば家小傳本トテ形り
寶基社明神の弦度平昌山さゝ尾花坂多希始物公より
御石側ナリ四位の持く千代古道鳥居の前乃

河五ノ二十六



其二

卷之二



解除川神あめ細川の神
夏越峯皇天門神帝の門
行合櫓夏越川ふかく
櫓をつゝ御祓所豊浦村屬村箱庭と新家との間
禰占神事土人一卒本ほりよ
毎年正月十五日豐能年久
巡史も出せり近隣の農夫集りて其年の
五穀の豊凶を

解除川 神あめ細
夏越峠 ちくひ川の神門
行合橋 夏越川ふかよ
御祓所 豊浦村属村箱庭と新家
粥占神事 每年正月十五日豊嶽年久タタキ年朝
五穀の豊みを
如ト土人立系街道四條村の間歩く往還の人の過よがゆを我
思ふ半の若魚鱗ふもと

占掌東身みのりの歎乃風

思ふ事の多き辭ふも向うぞ哉
古宇來身ふりて之の萩乃風
大塚の翁を所ふ東北巣鴨の死の塚
太陰神社延喜式出旧水走村

栗原神社 延喜式出 在原古事記
今尾栗原宮と称す
燒ケ火 土人の儀云むり 牧野の神社

姥ヶ火 実四時 ゆやくの池ゆのいけにかの姥身おとめの池いけ小身こみを投室なげむ
それよりは池いけの名なが姥おとめが池いけとて夏なつ來くわるはや
ゆくれ人ひとを懲うながし其その火ひを起おきる姥おとめが首くびを打たたき出だせんの火ひの事こと小
恩智おんちまで御ご火ひを起おきりて世よ俗ぞくが姥おとめ火ひとひ難ひがたトクニモ安あん
きのうり相あい森もりの後あと暑さわ熱ねつ姥おとめ氣きふらめりて度わたまふ却かく自じ然ぜんや
火ひを生うす者もの遠とおうだ御ご來くわの火ひを送おもてりあひと人ひと

平國乃
官居の
すきひち
迎村う
集つて
かと角せ
いとみゆ之
は源神と
軍神され
さもあん



被れく
れきて
くる
をあふ

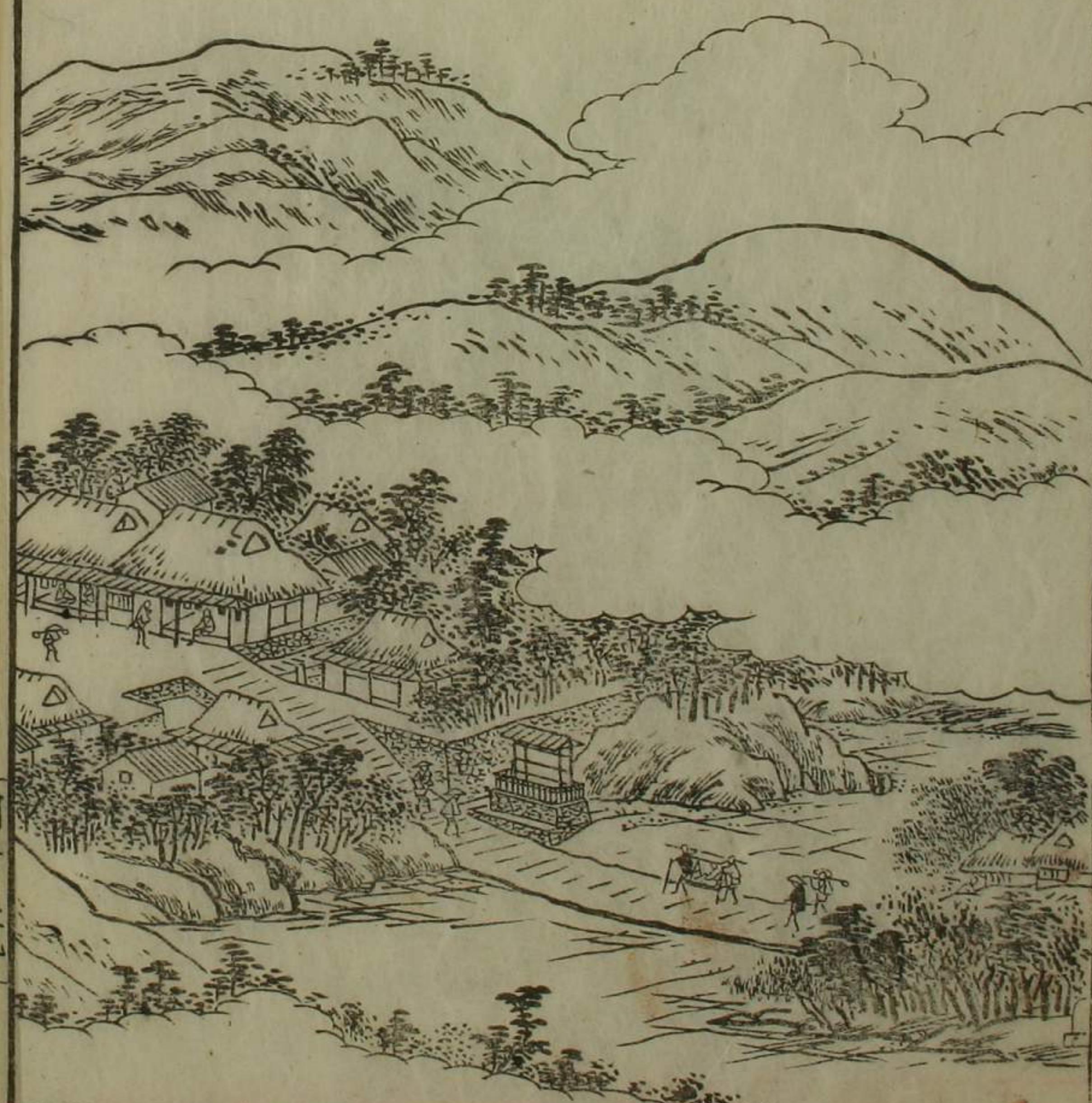
立斧



桙嶺柿

芭蕉翁

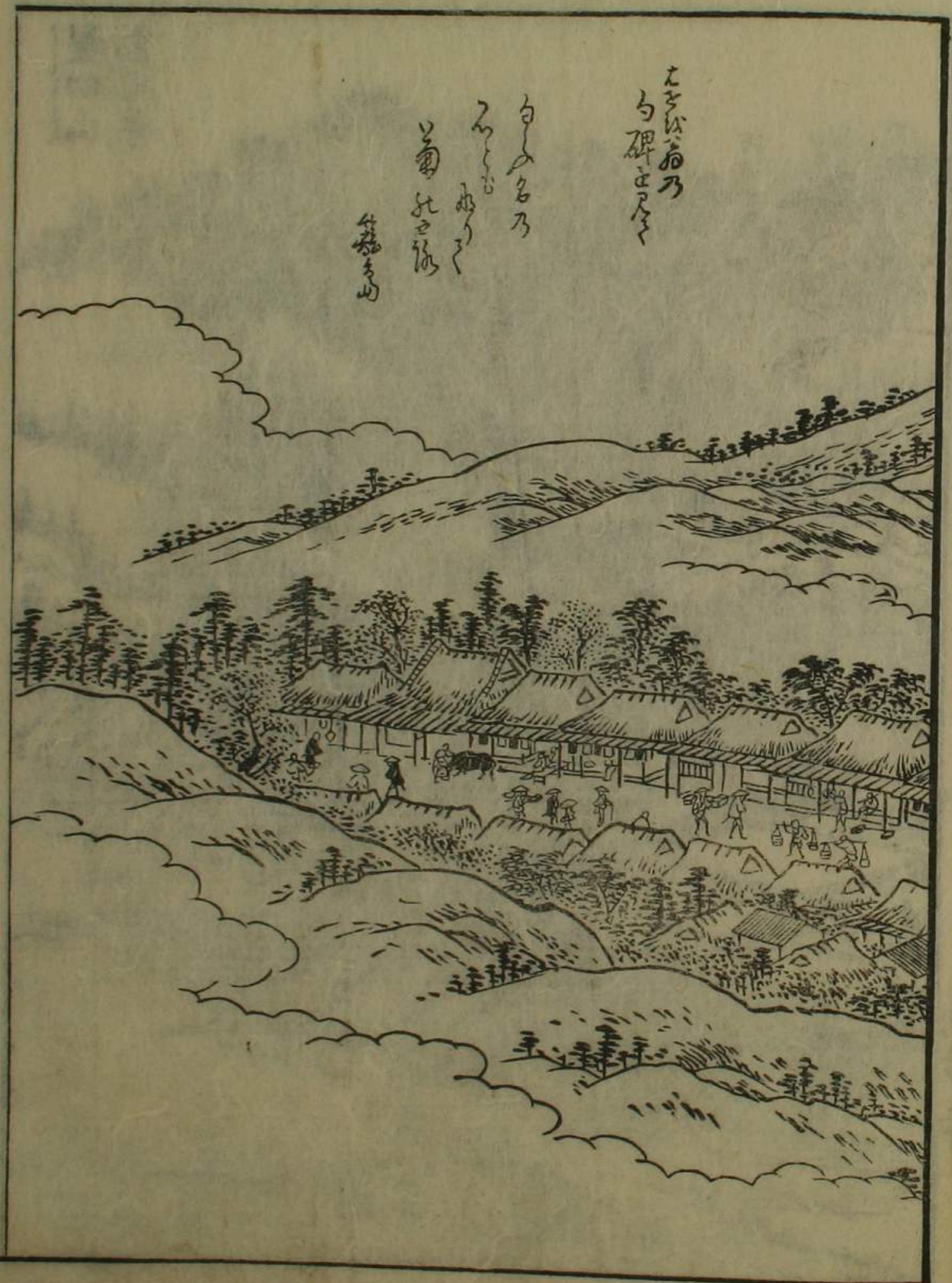
碑



白山乃
碑

白山乃
碑

白山



髮切山
慈光寺



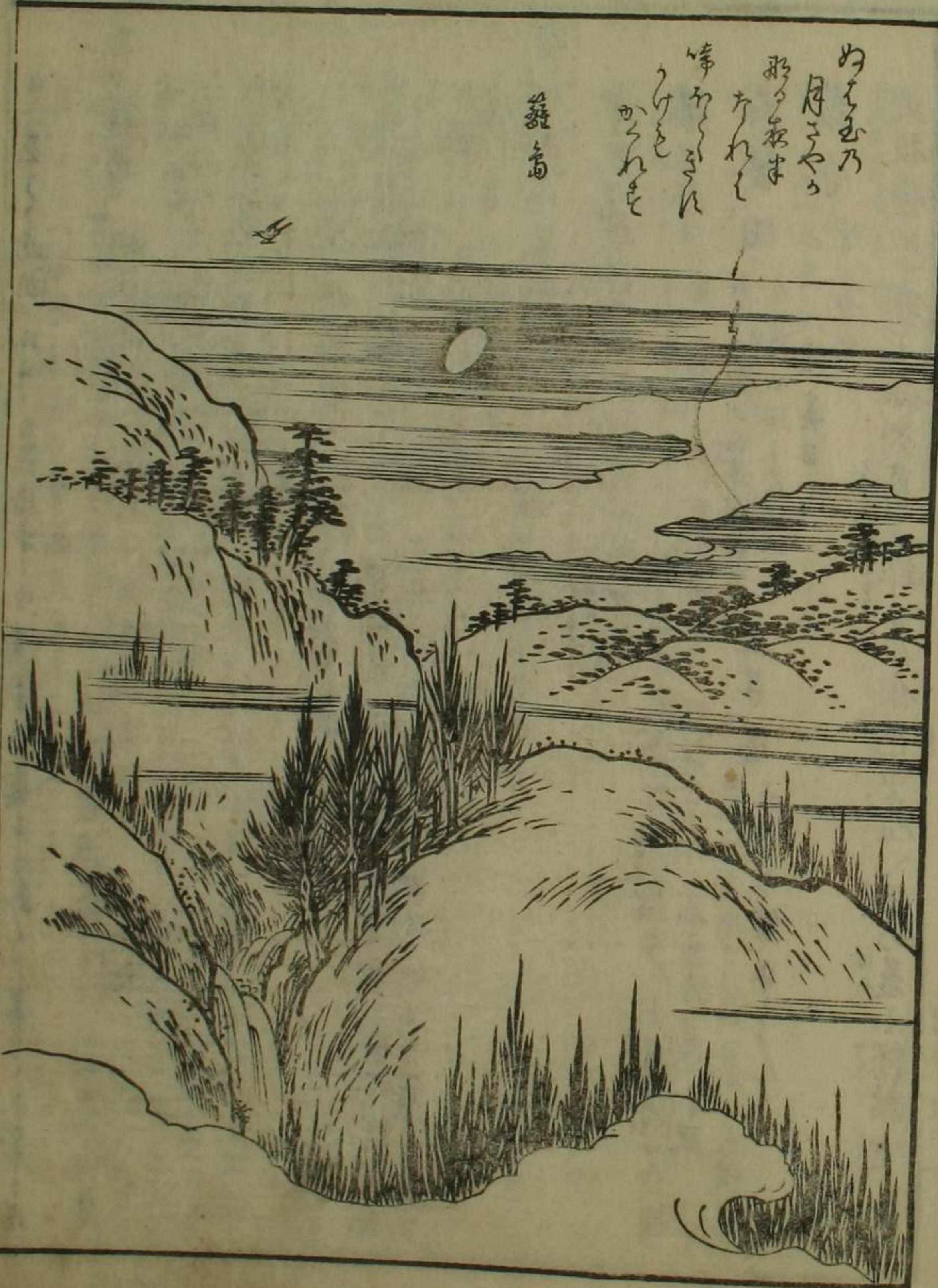
髮切山
聽時鳥



河五ノ北一

めくみ乃
月をやう
形をあま
かれく
峰をさげ
うけと
かくわき

蘿島



先立てるる御所の邊よりあくまつて、豈くもふ写すば
うきへ馬場言武の平朝天文志小見へ

桺嶺作

奈宮道より峰村小葉原旅舍多一東の舊小河内大和の
園場あり生駒の山腰續く小桺嶺と云故小桺嶺の名あり
一役ふはしふ乃松枝らひ小蟹尾一號くこれぞかく名付くも
いふ天正の頃豊臣秀長郡山の城を築く時に此
伐取へり今ふ大樹づ

葉れまふくわうのゆる節句

迎頭 寛政十一年己未十二月豊浦村の米耜は向碑

ふ建立く薦翁の百遠忌の追総と云又諸方の贈物の物と屬くこれと
小冊と信光の二柳の序ありく

葉の鳥を號せり

髮切山慈光寺

真言宗

卒尊復行者左下獨鉢公様

觀音堂

平堂の北小あり正觀音城安に縫哉うふ縫作の時

鬼髮田

鬼者嶽の樹林ふあり今捨心因五子嫁

鎮守

山王八幡妻日

支役優婆塞

和列葛上郡茅原邑の産く母の愛小獨鉢空う

院く口入空不く忽肚身一 舒明帝六年正月朔日誕ノ終日帝
三年辛卯十月廿八日出誕モモアリ七眾奉テ妙く慈般咒を誦モ房中日三十萬遍
少アリ時うる聰明睿智にて修驗道伏する信一 年二十二歳の時
家父棄く葛城山ふへく巖窟に安居モ房中三十餘年蕉葛と衣モ
松子と食ふ充く神呪詠诵一 白雲不驚一 て仙府小游遊一 鬼神
驅逐一 使令一 日城の靈嶽を修歷せびとよ半世一 ある時箕面
の龍小入く龍樹大士不謁一 又ト金沸嶽ふぞり葛城の石橋小言主神を
促モ神異妙奇側ぶ盈うだ 天智高の際時勝駒山の深溪小鬼賊有
て住返されが爲小凶害せし行者それを憐く其兩鬼を捕て兜縛を其地
於今鬼取ふぞり行者竟不かの鬼髮を擢んで地の巖陵小壁ニ兩の
役使せし金峰山ふ入らず前鬼後鬼ふぞり行者その頃遠岑小泊
其あ處小光明耀えりそれをあすて認乃小金容の大悲儀茲

これを幸するや一 宇次營一 ふと髮切と称ト寺號慈光寺と云

其景象へ東に大和の碧嶽西小難波の滄浪を湛く日想觀の便あひゆもあひ
月と寢て千岩の水波訪へ風と凜々と松林小琴と彈ぎ膏て
聞むうちニホの寺田六宇の傍房あり東海にて來因とから廻り
元龜の兵燹小羅く佛圖荒暴今僅小存を舊花荒譽楊柳
新柳りそよびあつうの観音の木

富山と郭公の名所と雖波津乃び遠近の騒人仰月と月の間に
まづく泊一風流を詠じて筆稿を寺下認む清か納言子紀の言葉
に本をのこれ葉さざてけいひ物でわく庭下小庭さす小庭も芳色
無くてねむのまゝたのあふ少く秋と秋ばかりかす一墨す
そは夕はくよひなどあひてはるやく筆下せむのよそ耳を
おほゆもまたたゞくしれをつけよんと何のうちせんせば風
韻不魁仄せられて詞か毎年遠近の佛士うふ裏く蜀韻のふを歌り
日くの風寄ふ

予観乎其風流の聲まことぞ

斐切山主
花亭

不動寺

額田村長尾國小野長尾山也號

卒尊不動尊弘法大師惟長を尺八寸許古と魏々御
塔人うと我年來加持水幽寺う三町許山奥小あり之際密法
之遠うて今僅小存石碑寺内小あり近岸高肉集院して此寺に色若キ和あを詔ゆゆ其跡を近年
高貴寺の意雲和上深禱して岩面小雛文宗小金額入
く不朽也形

其文云

天正壬の頃茶闇白近侍不久公牧昌社不祐

高内正定うち拂ちてみく此寺に入せたまつ

枯のこ房長尾のれぬそん茶雲もあけてつづけむ

斐龍居後

國茶寺伏長尾寺又游あるともつは御詔うち長尾の薄を今小賞観
きをあひはる景揚を下すふ蘚蘿もね枝小野を出鳥も林頭小
晴空巣烟寂々香火體々て清淨無塵の佛室あり





河五ノ三十五



長尾瀧
雄飛泉
四丈許
左右巨巖直下
巖面を傍
武殿不居

龍長尾山アシカあり雄苑象鳴サ四丈許左右巨巖直

下
卷

人曰 峰瀑布泉
丈言 岩面作
峰雄の滝の上小石より慈雲比丘
五チ年餘ひ居モ

此巻龍の氣象は小雲が飛び素續を畫不肖源氏明後
敵もがめりむうへ弘法大師額因寺小止暢の時以降ふありく
密法を傳へみぐく立大尊如化く長尾寺小安モンなると多々今ふ病
若れをみれば瀧ふ活ハラハラめまきを平倉ヒラカウと嘗く龍ふ公も崔嵬ツイる樵路ヤマノル
訪ねく廿餘所のふ奥ふかへそぞれちゆくも肺諭ホウシユ欬有は故アリハシミを
雙竜庵主書ゆい鳥内氏岩面小鷦サシせしわ其文曰

天正の頃赤間白赤久公牧岡社小説を寫内正定

叢書
龍華
卷之二

額田神祠
御母と鳥城入跡
と申れ御波の墓
神、額田大神先皇み御
應神廟乃子
（たやひ水鏡の

卷之三

頃神祠を造る所の事也。高城入姫祠は、紀古佐美祠と並んで、皆人祠ともいふ。額田大門神は、高内氏の家臣小傳であつて、有馬川幸仁親王の御守護也。

辛酉藥師佛像壹尺七寸許

此の事は、眞理に近い。豈能遠かく。故ふ意に聖徒反とも古道方
又も既に跡をもつてまよひ葛井寺のあふる所御通せ合ひ
國林二日市が終りて紀伊風氣常不至る

ト曰村山あり 奥言宗
寺鳥居の寂靜院小屬

奉尊千年觀者長又尺

小止宿 晴小居女籠王
蓑の中下祝ト捕陀路山の喬木不與ア見樹上不あり大附歎森

左中將業平卿 韻を承りて坐令と達志より中興を縁起上りし
業平塔境地不詳也少頃り翁の所成

のぶやま
神祇村の上方へ山脈修道
狗走續く山嶺崎絶す

神社
石切
魚籃

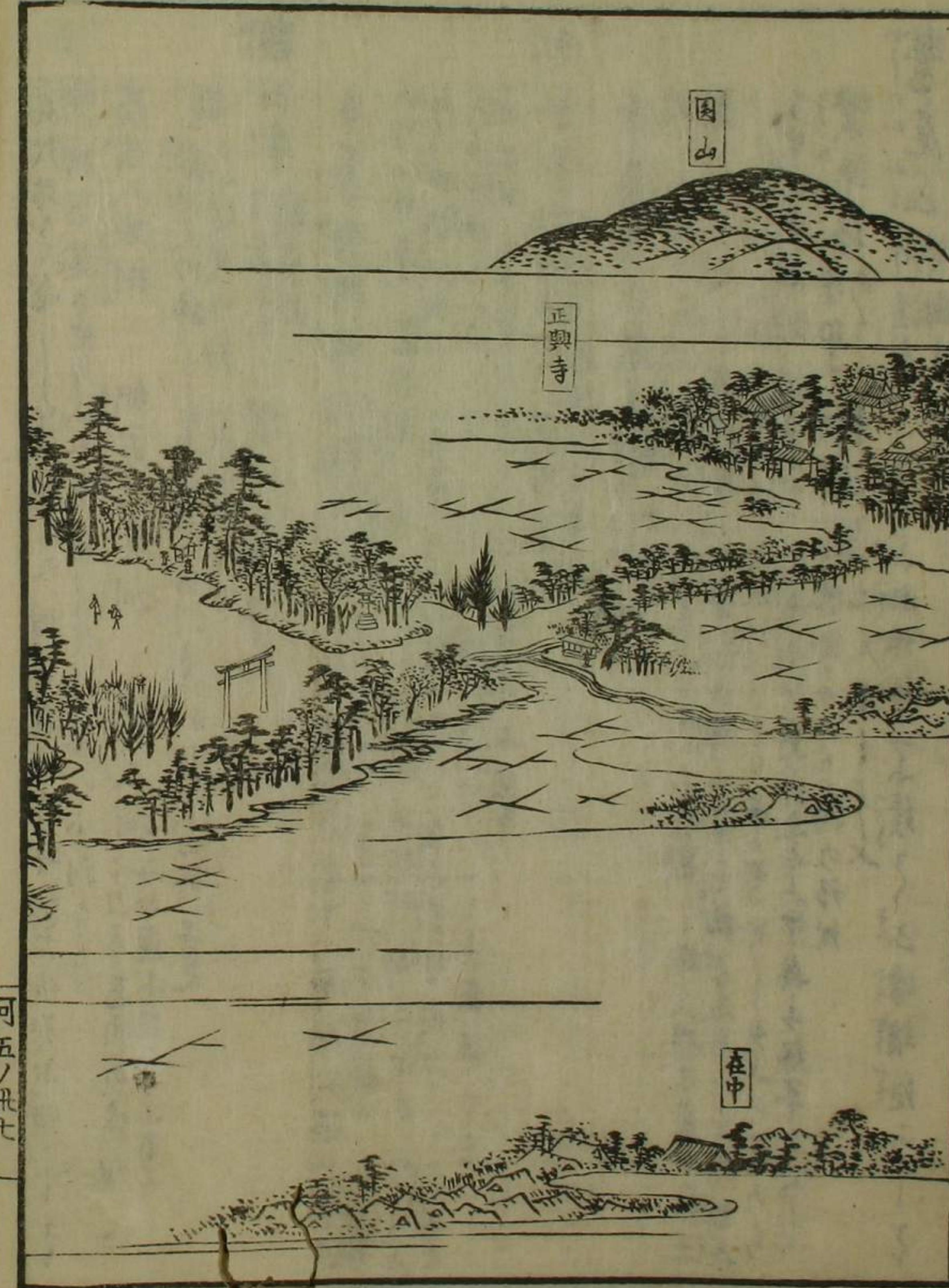
本社



圓山

正興寺

在中



山
鷲尾



河五ノ木八

石切劍器神社二座神龜村小あり）延喜式出三代實保云真親七年
トノ社ニ萬社ノ例多六月十四日神並芝植付額田日下等
五ヶ村生太郎祭を供ノハ
興法寺神並村の上不あり
真言宗
鷲尾

牛尊二面千手觀音 聖武天皇 行基大士 婆羅門等者合宿

香山高山鷲役り者用墓廢居り基婆羅門うふ佐ノ又弘法大師
止揚して諸堂が當たる年來久遊又く荒藏今
僅小石也承縵年中大あ丹後守入通淨味神並村
は山中で廿四町間左右小橋の坂本所植子年累々
を枯朽り減を経れども殊生の花盛りある也
ては急の事無り

什寶十二神將十二般同羊

香山伊駒山の續あり山趾小日下里あり
神武紀云遡流而上經至河内國草香邑白肩之津云
聖運の因歩及

萬葉集の長歌草香山次より
忍照、蘿波をゑく、打麿、草あれ山を、タクレ也
吾えられ、ふせ小けきるアビの、にくひく

草



忠臣日下 部使主

日本紀云

履中

天皇の皇子市邊押磐の家臣

也

皇子批命く薨後使主竊小二人を
公を立て危難と避又攝列編見山の岩窟小瀬居
喜前使主らうろふやうよれ年老か夜食小
基之を奪走るの事無く遂不従せ死を二人の王孫アマミノミコト
衰アラシ之は清流沛社を立す由吾因考るより父乃志成
徳赤石の海アカシマツリ其時清寧天室清祐清人清猶の
日ヒマツク漁倉ウカ二人の皇子批命く大下隣玉生をゆひ立中
仁賢天皇とぞある其舍宋宮と殿宗天皇とぞ錦

河内名所圖會卷之五 終

